

学会参加報告記

金子賢治

九州大学

9月の16日から21日まで、イギリス・マンチェスター市のマンチェスター・セントラルで開催された第15回ヨーロッパ顕微鏡会議（EMC2012, EMCはEuropean Microscopy Congressの略）に参加した。マンチェスター・セントラルは19世紀後半のマンチェスターにおける人口増加と交通機関の発達とともにマンチェスター市の三つ目の駅として1880年に産声をあげ、1969年に利用人口の低下と共に駅としての使命を終えるまで、交通機関の要として役割を果たしてきた。1978年にはコンサート会場・展示場として生まれ変わり、2007年からはマンチェスター・セントラル・国際会議展示場として英国北部の情報発信地として中心的な役割を果たしている。駅として使われていた当時の煉瓦造りや時計がそのまま残っており、現在でもその当時の面影を残している。

学会はシンポジウム形式で行われ、大きく分けると装置開発と手法、材料科学、生命科学の3部から構成され、7件の基調講演、430件の口頭講演（120件の招待講演を含む）、780件のポスター発表と総発表件数だけで1300件を超え、膨大な数の発表件数を記録していた。学会本部に依れば登録者数は1600名を超え、47カ国から参加していたとのことである。このように参加者が記録的な数字であったにも関わらず、機器展示関係者を除くと日本人参加者数が極端に少ないように感じたのは私だけでは無かったはずである。学会期間中に多くの関係者らから「なぜ日本人の参加者数が少ないの？」と尋ねられ返事に窮していた。

Colliex教授やHowie教授を初めとするヨーロッパの顕微鏡学会の重鎮らが基調講演を、また、多くの新進気鋭の若手研究者らが積極的に最新の研究成果をプレゼンしていた。やはり日本人として、このような会議に積極的に参加し、情報を発信し、情報を貪欲に吸収する必要があるのでは無いだろうか？筆者自身、EMC2012に参加したことにより、欧米における顕微鏡研究が向かっている方向を再度認識することが出来たのは誠に良い経験であった。

材料としてはグラフェンをはじめとする軽元素材料、触媒や環境材料、装置開発や手法としては収差（色収差、球面収

差双方）、低加速電圧TEM、3D/4D、プレセッション回折、また特別講演としてCockayneメモリアルなどに参加したが、特に印象に残っていたのは最近PNNLに移籍したBrowning教授が発表していたDTEMに関する講演（超高速で記録する必要性）、アントワープ大学のBals教授が発表していた原子分解能の3D再構築、EPFLのCantoni教授が発表したFIB-Tomographyによる広範囲における3次元解析、Krivanek教授のNion社のSTEMによる成果に関する解析例の報告、CEOSのZach博士による「補正後は何が分解能を劣化させるか？」……といったところであろうか。当然ながら多くのセッションで立ち見が出ていた。

学会期間中は朝晴れていたかと思うと昼には曇り、夕方からは雨、といったイギリス北部特有の変わりやすい天気を経験し、真にイギリスに居るというのを実感した。

余談

イギリスで開催されたということもあり、リーハイ大学のKiely教授、ミシガン大学のMansfield教授、ケンブリッジ大学のMidgley教授、西オーストラリア大学のSaunders教授、レイパスツール研究所のShorte所長、オクスフォード大学のWilkinson教授らを初めとする約30名のブリストル大学の同窓生らと旧交を温めることができ、大変楽しい一時を過ごすことができた。



ブリストル大学の即席同窓会：左から Meaden 博士（ブリストル大学・BLGProduction社）、筆者、Midgley 教授（ケンブリッジ大学・ヨーロッパ顕微鏡学会会長）